

〔枕草子^六〕みつばかりなるちこの、ねをびれてうちしはぶきたるけはひもうつくし、

〔源氏物語^{若紫}〕君はなに心もなくね給つるを、いただきおどろかし給におどろきて、宮の御むかへにおはしたると、ねをびれておぼしたり、

〔枕草子^三〕にげなきもの

老たる男のねまどひたる

〔倭訓栞^{前編}〕^{二十}ねほれる。寝惚る也、ねとほける意也、著聞集にねぼけてと見えたり、

〔古今著聞集^{十六}〕^{利口}女も又ねぼけて、おとこの口ぞとは思ひよらで、^略下

〔今物語〕嘉祥寺僧都海惠といひける人の、いまだ若くて病大事にて、かぎりなりける比、ねいりたる人、俄におきて、そこなるふみなど取入ぬぞと、きびしいはれけれども、さる文なかりければ、うつ、ならずおぼえて、前なる者どもあきれあやしみけるに、みづから立走て、あかりしやうじをあけて、たてぶみをとりにて見れば、ものども誠にふしぎにおぼえてみる程に、是をひろげて見て、しばし打あんにて返事書てさし置いて、又頓てねいりにけり、起臥もたやすからずなりたる人の、いかなりけることにかと、あやしみける程に、しばしねいりて、汗おびたしく流れて、起上りてふしぎの夢を見たりつるとて、語られける、おほきなるさるの、あゐすりの水干きたるが、たてぶみたる文を持て來つるを、人の遅く取入つるに、自らは是を取て見れば、歌一首あり、
たのめつ、こぬ年月をかさぬれば、くちせぬちぎりいかゝむすばんとありつれば、御返事に
は、

心をばかけてぞたのむゆふだすき七のやしろの玉のいがきに、とかきて參らせつる也、是は山王よりの御うたを給りて侍る也と語られければ、まへなる人あさましくふしぎにおぼえて、是は只今うつ、に侍ること也、是こそ御ふみよ、又か、せ給へる、御返事よといひければ、正念に